

氏 名 田中 義昭

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第218号

学位授与の日付 平成24年9月28日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 弥生時代地域農耕社会の研究

論文審査委員 主 査

教授 藤尾 慎一郎

教授 広瀬 和雄

准教授 上野 祥史

教授 安藤 広道 慶應義塾大学

准教授 若林 邦彦 同志社大学

論文内容の要旨

序論：周知の通り弥生時代は水田稲作農業を基調とする生産経済の時代である。水田稲作に加えて畑（畠）作や漁業活動が副次的に行われたことが知られ、さらに、いわゆる家畜飼育に関してもその存在を証する研究が進んできている。これら副次的生産が有する経済的意義は決して小さくないが、なお、当代全生産活動における水田稲作農業への投下労働の総量と成果が圧倒的な比重を有していたことは認められねばならない。

水田稲作に基づく生産経済の進展は、当該社会内において「ヒト」と「モノ」の相対的剰余を生み出し、その蓄積が増進したことは想像に難くない。同時に、水田稲作の展開は、所与の土地並びに自然環境への対応と不可分に結び付いて進行し、生産活動の諸過程を通じて生産対象への関わり方や労働組織、あるいは文化といったものに個性を付与し、結果、各地で一定の地域空間と独自の地域性が形成された。つまり、弥生時代は水田稲作に基礎づけられた地域と地域性が生まれ、育まれた初源の時代といえることができる。

そこで本論では、初期農業生産段階における「ヒト」と「モノ」の諸関係の形成・発展状況を農耕集落の構造と展開相を基軸に照射し、その広がりの中に見られる地域相と地域特性を描出しようと思う。

第Ⅰ部：本論の展開においては、第Ⅰ部において、弥生時代農耕集落研究を巡る課題状況を確認し、課題へのアプローチの仕方並びに研究史を概観して、本論の目指すところを提示する。

第Ⅱ部：本部では、南関東地方、とりわけ横浜市域の弥生時代集落遺跡の検討を通じて農耕集落の基礎単位となる集団として世帯共同体を措定し、その集合体としての地域的集団である農耕共同体を考定する。主たる分析対象遺跡は横浜市三殿台遺跡、朝光寺原遺跡、大塚・歳勝土遺跡とそれらの近隣に存在する遺跡である。

これらの集落構造と変遷相から拠点集落一周辺集落の2類型を設定し、その関係性の中に農耕共同体としての集団構成を見出す。さらに、南関東南西部地域での農耕共同体的構成の展開状況を探り、拠点集落の役割と周辺集落の分散性・浮動性等について考察する。ここで大塚・歳勝土遺跡の構造から拠点集落の複合形態と周辺集落の単自形態を確認して、後論への布石とする。

第Ⅲ部：本部では、まず弥生時代を起点とする水田農業の展開過程を、水田構造・農耕具類・農耕者集団とその労働編成の諸要素の個別的検討と組み合わせ状況を軸に考察する。そして、弥生時代以降の農業生産の展開とその諸画期についても時期的特徴を総合的に捉え、弥生時代食料生産の相対的独自性を明らかにするとともに列島水田稲作農業の特性が家族労働主体の集約的農法とその集成による大規模経営の展開にあることを示したい。

また、この特性は、弥生時代の水田稲作農業を基軸にした食料生産体制に発現する。以後、その生産体制を基礎づける農耕共同体の構成様相は、階級的構成社会への傾斜と古代国家成立により変異を来すが、拠点集落を核とする水田経営主体の農耕共同体の基本的性格は存続したとみる。このことを古代馬把の分析から論じる。

第Ⅳ部：本部では、検討対象地域を日本海沿岸の山陰地方に移し、近年弥生時代の顕著な遺跡が見られるようになった山陰中央部の中海・宍道湖沿岸地帯の弥生時代集落の諸相と地域性に焦点を当てて論述する。

最初に、地域考察の前提となる地域概観と弥生土器の編年的研究について述べる。山陰中央部の地域色が明瞭になる中期後葉以降の土器編年と鉄器普及状態の検証との関連で後期の土器編年についてはやや詳しく論じたい。

これを受けて、拠点集落候補の西川津遺跡の様相を探り、併せて出雲平野の拠点集落矢野遺跡について検討し、その基礎的生産と手工業的生産、あるいは内外交流の様相を明らかにしてこれら拠点集落の地域センター的役割と意義を述べる。同時に周囲に存在する周辺集落との関係性を考察し、西川津・矢野両遺跡と周辺集落群が一つの農耕共同体的農耕集団（四絡遺跡群）を形成することを明らかにする。

次いで山陰地方の周辺集落を数例上げてその構造と特徴、ことに鉄器所有に注目して弥生時代後期段階における周辺集落の単自生の意義を明らかにして拠点集落一周辺集落関係の検証に備える。

第V部：本部では、中海・宍道湖沿岸や日野川下流・米子平野と周辺の弥生時代集落遺跡の分布状態を、平野形成過程と併せて分析し、沖積地の微高地や丘陵に囲まれた谷盆地を単位とする農耕共同体（拠点集落一周辺集落）群を析出し、中期後葉頃から、それらが水田経営上の水利・灌漑や内外交易を契機として広域共同体的構成をとるようになることを示す。

第VI部：本部においては、前段において大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡について、その立地、青銅器群の内容と特色から両遺跡の歴史的意義に触れる。同時に、山陰地方全域における弥生時代青銅器の種類と分布から地域農耕社会と併存状態に見られる特性、とりわけ、西部出雲域の傑出したあり方に注目して、そこに中期後半から後期前半に優勢な広域共同体が農耕共同体内の協働関係が具現する農耕祭祀について考察する。

具体的分析は、三重の環壕を巡らす祭祀的遺跡の田和山遺跡を対象とし、その構造と変遷を掴む。そして、周囲の集落遺跡と墳墓遺跡の様相から田和山遺跡との連関を探り、小河川忌部川下流における農耕共同体の形成過程と構成について考察する。さらに、西川津遺跡・志谷奥遺跡・中野仮屋遺跡出土の青銅器を手掛かりに出土地一帯の農耕共同体群について検討し、地域農耕社会の形成を探る。

後段においては、弥生時代青銅器の検討に次いで後期後半を特徴づける四隅突出形弥生墳丘墓について、特大四隅突出墓が集中する西谷墳墓群の様相と特徴を述べ、これが出現した背景に鉄器の導入と広汎な普及が存在したことを示す。そして、中期後半以降の地域農耕社会（広域共同体）の展開相に「古代出雲」の原像を見出したい。

第VII部：本部では、「原史期集落」としての臨海（水）性広域共同体の性格とその歴史的意義を問うことを主眼とする。再度、山陰地方、就中、中海・宍道湖沿岸の臨海（水）性広域共同体の様相を検証し、そこに青銅器・鉄器等の金属器を初めとして種々の外来遺物が見出されることと共同体内の階層構成に目配りし、祭祀と対外交易を梃子に広域共同体首長の顕在化する事態について考察する。特大の四隅突出墓の出現がその具体像を提供するとみる。

こうした諸動向は一にかかって中国大陸における秦漢帝国の成立と対外拡大に一要因がある。そのことを中国雲南省の石寨山遺跡と滇国の構造・性格、東南アジアの「港市国家」群、古代ローマ帝国の周縁に当るヨーロッパ北海沿岸の「原史期集落」と対比して考察し、臨海（水）性広域共同体を「駈商国」と呼称することを提唱したい。また、その歴史的意義については「集中化」・「広大化」・「特殊化」現象として把握し、そこに内在する「格差」のあり方についても共生・協働の視点から時代性の側面として把握してみたい。

結びとして、弥生時代の共同体研究が有する今日的意義を確認し、そこから家族と地域共同体の歴史的位相のさらなる解明の必要性や課題にも触れる。

博士論文の審査結果の要旨

(論文審査結果) [平成24年8月24日実施]

【本論文の研究史的意義】

弥生時代の集落遺跡を基礎資料として展開される弥生社会論は、1940年代の静岡県登呂遺跡で見つかった集落遺跡の調査結果を皮切りに、和島誠一や近藤義郎による、基本的な単位となる集団の把握とその展開過程の理論化段階をへて、これまで数々の論考が発表されてきた。

申請者の田中義昭氏は、とくに1980年代のはじめから横浜市域をフィールドに発掘調査や分布調査の成果を駆使して、水系を1つの単位として「群」と捉え、地域社会を復元的に研究するための基礎的な方法論を提示・実践したことで知られている。その研究は、登呂以来、平板な農耕社会と理解されていたそれまでの弥生社会像に、少数の「拠点集落」と多数の「周辺集落」から構成される弥生社会であったという新しい視点を導入することで、研究史上、高い評価を受けている。この基本的な考え方は、今も継承されている。

その田中氏が80～90年代にかけて調査した島根から鳥取にかけての日本海側に分布する集落遺跡と西谷墳墓群などの首長墓を対象として、新たな弥生時代地域農耕社会論の特質を論じるとともに、山陰のあり方を、古代の巨大帝国に隣接する東南アジアやヨーロッパ北西部地域との比較検討をもとに、世界史的に位置づけた論考として発表したのが、本申請論文である。

本論文の目的は、初期農耕生産段階におけるヒトとモノの諸関係の形成・発展の状況を集落構造とその展開相を中心にすえ、その広がりの中かにみられる地域性と特性を抽出することとある。そしてその根底には筆者自ら記すように、家族と地域の今日状況をみすえながらの研究姿勢がある。近代化の過程で乗り越えるべき対象であった共同体が、20世紀後半から始まった農(漁)村地域における過疎・少子化・高齢化の加速度的進行を前にして、村社会の崩壊に向かうとき、再び共同体に光があたり、共同体復権と新共同体の創造を目指す関連諸科学の新たな動きのなかで、今、考古研究者として何ができるのか、弥生時代の時代性と地域性の解明、並びにその意味づけを試みることで、社会的責任を果たそうとする田中氏の強い決意をみることができる。

【本論文の構成】

本論文は8部20章からなり、分析対象は集落遺跡のみならず、墳墓、青銅器を加え、かつ世界史的視野に立った総合的なものとなっている。I部は弥生集落研究の研究史を整理し、課題を設定の上、分析法を示し、本論文の目的を提示する。主に70～90年代に田中氏が発表した論文をもとに構成されているが、補論として、21世紀の弥生集落遺跡研究に対する、田中氏の考え方が示されていて内容的にも興味深い。第II部はまさに南関東時代の自身の研究をふまえ、現在まで引き継がれている集落遺跡研究に関する基本的な方法論を示して、類型化する。第III部は、弥生以降の農耕共同体にも、拠点集落を核とする水田経営主体の農業共同体の基本的性格が存在することを、古墳～古代にかけてみられる馬柁の分析から論じたものである。第IV部は、山陰を舞台に集落の類型化の上に、低地部に位置する農耕共同体の形成について具体的に述べる。第V部は、出雲平野と米子平野という山陰低地部の農耕共同体が、丘陵部まで含めて水田経営上の水利や灌漑、内外交易を契機に広域共同体を形成していく様相を提示する。第VI部は、広域共同体の協調関係を表すとされる農耕祭祀を考察。南関東では論じられなかった青銅器祭祀を媒介とする農耕共同体について述べる。あわせて、青銅器の大量埋納遺跡である荒神谷、加茂岩倉遺跡を取り上げ、その歴史的意義にふれる。第VII部は、これら山陰にみられる臨海性の広域共同体が、秦・漢帝国の成立と周辺への拡大を契機に成立することを、東南アジアの港市国家、古代ローマ帝国の周辺にあたる北海沿岸の原始的集落と比較することによって導きだし、世界史的な位置づけを試みている。

【本論文の特質と課題】

『弥生時代地域農耕社会の研究』というタイトルの割には、南関東と山陰しか取り上げられていないため、一見、九州北部や近畿など、弥生時代の主要な地域はどうなのか？という疑問にかられるが、実は、南関東と山陰という、2つの地域だけで目的に迫った点に、本博論の特質がある。

すなわち集落論の基礎的な操作を行う上でもっとも考古学的な条件に恵まれた地域(住居址や住居群の検出、群認定が容易)である南関東において、弥生集落論の基礎的な方法論を打ち立て、モデル化を行い(集落論の作業概念の構築)、山陰の弥生遺跡で見つかる青銅器や鉄器などの遠距離交易によってでしか得ることができない文物の入手という具体的な証拠に基づいて、先の作業概念を歴史概念にすることに成功しているのである。

水田稲作を生活の基本とする弥生時代の日本列島の各地において、拠点集落と周辺集落という基本的な組み合わせを認めることができることについては、現在の研究者間に大きな異論はない一方で、沿岸部の拠点集落のすべてが対外交流に依存しながら広域共同体からやがてはクニへと昇華していったわけではなく、地域ごとの独自のまとまり方は当然、あるものと考えている。それらを求める研究は、今後も各地で行われていかなければならないものである。

博士論文という性格上、30年以上前に書かれた論文も含まれているので、その後、見つかった新資料などからみて必ずしも現在の知見と一致しているというわけではない。それは弥生集落のモデル化を行った南関東においてもしかりで、1つ1つの集落遺跡のとらえ方というマイクロな部分から、複数の拠点集落群からなる広域共同体といわれるものの規模の違いといったマクロな部分まで、いろいろであった。

さらに対外交流といっても出雲自身が漢帝国に直接アクセスしたというよりも、列島内では九州北部を、対漢的には朝鮮半島を介した、いわば二重に間をはさんだものであるだけに、田中氏が比較対象とした滇国のように、漢帝国と直接、向き合わなければならなかったクニとは、同列に論じられないという指摘もあった。

しかし自給自足や内部発展では広域共同体化が成し遂げられたわけではないという、現在につながる考え方を早くも指摘していた論文も含まれているなど、いわゆる「弥生都市」の問題といった、現在の弥生集落研究とも無関係ではないことを考えると、課程博士論文とはまた違った博士論文の特質をみることができる。

これらの指摘は、本論文に始まる一連の研究を、今後いっそう発展・充実させるためのものであって、集落論に始まる弥生社会論の基本文献になるものと判断される。以上を総合的に判断して、審査委員一同は本論文の学術的価値は高く、博士論文としての価値が十分にあるものと全員一致で判定した。